

野国第2遺跡発見の曾畠・轟系土器について

新田重清

1. はじめに

1974年9月頃、当館に所蔵されている考古資料を整理している際に、沖縄の貝塚時代後期の土器とともに一見、異色感を帯びる土器数片を確認した。河口貞徳氏が、すでに発表している喜界町赤連出土の土器と類似するものであり、その系統だろうと考えていた。いずれにしても、従来の沖縄の土器とは、その文様や器壁の厚みが異なるものであり、今後注目すべき土器だと関心をもっていた。

以前に、筆者らが浦添貝塚で市来式土器を発掘し、確か、1971年頃・貝殻文土器を追求している時に、多和田真淳氏所蔵の資料の中に野国第2遺跡出土の貝殻文土器と条痕文土器（図版第2-2）を確認し、^{註1}諾解を得て「沖縄浦添市浦添貝塚出土の市来式土器について」の報文の中で資料紹介をしたことがある。この多和田氏所蔵の貝殻文土器と博物館所蔵の赤連系土器とが同一遺跡で採集されたことがわかったのは、昨年（1975年10月）のことである。博物館所蔵のものは、1956年頃、嵩元政秀氏（当時博物館勤務）が高宮広衛氏（現・沖縄国際大学教授）と本遺跡を調査した際に検出したものである。その後、多和田真淳氏が同遺跡を調査した際に前述の貝殻文土器と条痕文土器を発見されたようである。筆者も1971年1月上旬、本遺跡を調査し、川口近くの固い褐色砂層から無文の厚手土器と須玖式系統の弥生式土器1片を採集したことがある。

ところで昨年（50年）の6月頃、読谷村渡具知東原で、繩文前期の土器が発見され、高宮広衛氏らの研究によって曾畠・轟系土器に間違いないことがわかり、沖縄の考古学研究史に画期的な波紋を投じたが、野国第2遺跡出土のある種の土器は、東原出土の曾畠・轟系土器と類似したものがあり、遺跡の立地も共通したものがある。そこで、昨年の10月、佐賀県立博物館で開催された学芸員研修大会には、資料を持参し、佐賀県立博物館 森醇一朗学芸員・長崎県立美術博物館 下川達弥学芸員、福岡市立歴史資料館長 三島格先生・熊本大学白木原和美教授・同大学

図版第1 野国第2遺跡全景

小川の周辺の土手で、水面に近いレベルから曾畠・轟系土器が検出された。



（にったじゅうせい・沖縄県立博物館学芸員）

小谷凱宣助教授・熊本市立博物館 富田紘一学芸員の諸先生方には、本土の曾畠・轟系土器との比較検討をお願いしたところ、間違いなく同系統だろうというご意見と、要素的には類似している点もあるが、こちらの資料不足で資料の追加が必要であろうという懇切なご教示をいただいた。特に小谷凱宣助教授には多忙をもいとわず、熊本県内の曾畠・轟系の遺跡を案内していただいた。種子島博物館 鮫島安豊氏のご配慮で種子島出土の曾畠式土器を調査し、遺跡を巡検した。

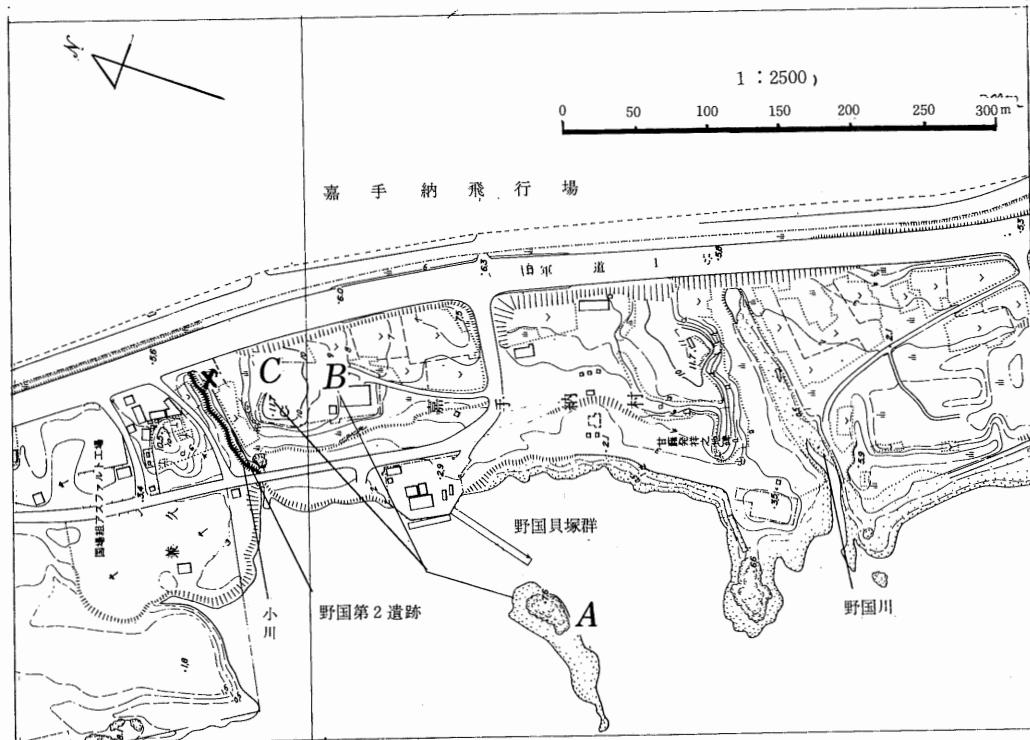
これらのご教示を踏まえて、野国出土の資料を検討した結果、ある資料は曾畠・轟系土器に間違いなかろうとおもわれたので、再び多和田氏所蔵の該資料（1948年12月に博物館に寄託されている）と当館所蔵の曾畠・轟系土器について資料を紹介する。

又、遺跡名については、従来、野国貝塚群と呼ばれている遺跡群とは性格を異にするものであり、改めて野国第2遺跡と命名した。^{註4}

本稿を草するにあたり、いろいろご教示いただいた諸先生方、ならびに資料の発表をご快諾いただいた多和田真淳氏、嵩元政秀氏には衷心から厚く御礼申し上げます。

2. 遺跡の位置・環境

野国第2遺跡は、那覇市から沖縄本島中部嘉手納町に至る途中、米軍の太平洋地域における最大の基



第1図 野国第2遺跡

地といわれる嘉手納飛行場の道を距てた反対側にある。

地籍は嘉手納町兼久下原に属し、嘉手納飛行場から流れる排水が、両側の標高10m内外の隆起石灰岩からなる小丘陵に狭まれた低湿地帯を流れて海に注いでいるが、その小川の周辺が曾畠・轟系土器の検

出された遺跡である。遺跡の高い所で3mであるが、検出されたレベルは、もっと低い2m以下の固い褐色砂層である。

野国第2遺跡周辺には、ニューヨーク自然博物館考古学部長J・バード博士等によって調査され、開元通宝の出土した野国貝塚群や野国総官墓地付近のマーチ層に包含されていた爪形文土器出土地など、多数の遺跡があったが、採砂と採石のため、殆んど消滅してしまった。からうじて破壊から免れたのは、野国貝塚群のうちC地点と本遺跡だけである。

3. 土 器

本遺跡から検出された曾畠・轟系土器は、各氏により時期を異にして採集されているが、筆者がわかるのは15片である。そのうち、有文のある土器片を図版第2-1・2に示した。

口縁が欠損し、しかも小破片であるため器形は不明である。器厚は11mm内外が多く、うす手で6mm、最も厚いもので13mm計測される。胎土には、主として長石類が含まれ、石英・黒雲母・千枚岩の細片が混入している。他には、雲母を主とする砂岩の異質岩片が部分的に濃集するものもみられた。以上のテンパーは喜屋武同村貝塚出土の曾畠・轟系土器と類似した様相を示しているが、野国出土の方に千枚岩の細片がみられるることは異なっている。土器製作にあたっての胎土の地域差を示すものであろう。本土の曾畠式土器には、胎土に滑石を含むものが一般的であるが、本標品を当館の大城逸朗学芸員にみてもらったところ、滑石と認められる鉱物は含まれていないとのご教示を得た。

色調は褐色・黒褐色・暗褐色を呈するのが殆んどであるが、一例だけは橙色を帯びた褐色を呈している。焼成は全般的に良好であるが、中には粗悪でもろく、ひび割れの状態を示しているものもみられる。

文様は竹籠工具による刺突文と沈線文、貝殻による貝殻文と条痕文がみられ、又、貝殻縁による器面調整のための条痕が地文としてのこされているものもある。

図版第2の1-1及び同図版3の2は貝殻縁による地文が一見、文様のようにみえる胴部片で、器厚は11mmである。同図版3の1は、種子島本城遺跡出土の曾畠式土器であるが、器厚も手法もよく類似している。内器面（同図版3の下）の調整も類似した条痕がみられる。資料を比較検討するために掲載した。

図版第2の1-2は、焼きの固い褐色又は黒褐色を示す土器片で、器厚は11mmである。文様は、籠による連点状刺突文と器面調整のための地文がみられる。胴部片であろう。

図版第2の1-3・4は刺突文であるが、3は施文具を深く刺し込んで米粒状をなしている。器厚は12mmである。4は、器厚が6mmで採集資料中、もっとも薄手にぞくするもので、色調は橙色を帯びた褐色を呈し、焼成良好な土器である。文様は連点状の刺突文である。

図版第2の2は、貝殻腹縁による圧痕文と条痕文であり、同図版2の1は器面調整による条痕がみられる。^{註5} この種の土器は読谷村東原発見の土器にはみられないが、恩納村塩屋貝塚の採集品には類似した土器がみられた。^{註6} 器厚や胎土、調整手法から図版第2の1の曾畠・轟系土器と類似したものであり、この種の土器も曾畠・轟系土器の範疇か、もしくはその影響下にある土器かと考察されるが、確言は控えたい。

4. む す び

以上、野国第2遺跡から検出された曾畠・轟系土器について紹介してきたが、何と言っても資料が貧弱であり、これだけで遺跡の性格を検討づけることは困難であるが、遺跡の立地や出土資料から読谷村渡具知東原遺跡に次ぐ縄文前期の曾畠・轟系遺跡であることには間違いない。しかも、遺跡は殆んど完全な状態で保存されているので学術上も重要であり、早急に指定する必要がある。

喜屋武同村貝塚や本遺跡から得られた曾畠・轟系土器に関して、その知見や問提提起について詳しく述べる余裕はないが、若干ふれておきたい。即ち、沖縄の曾畠・轟系土器は、本土の曾畠・轟系土器と文様・手法・器厚などの点でよく類似し、又、遺跡の立地も共通している。土器の形式も曾畠式・轟式両者の中間型式などに分類できる。いくつかの型式がセットになって検出されている。これらの曾畠・轟系文化は、具体的にはどのような経路を経て沖縄に移入され、土器文化をつくりあげていったのか。また、従来古いと考えられていた荻堂・伊波系の土器文化とはどのような関連があるのか、まだまだわからない点が多い。更に、曾畠・轟系土器の発見によって、従来の沖縄先史文化の編年（土器形式の先后関係）を再検討する必要に迫られており、これらの問題は今後の課題である。

ところで、こゝで注目したいことは曾畠式土器（文化）の源流と分布であるが、その源流は朝鮮の櫛目土器（文化）に求められるようであり、その分布は従来、九州西北部の長崎・佐賀・熊本を経て鹿児島・種子島・屋久島・草垣上ノ島（鹿児島県川辺郡笠沙町）まで確認されていた。沖縄各地で曾畠系土器が発見されることによってその分布は南下し、広範にわたる文化圏をなしていたことがわかった。

註1 河口貞徳 奄美における土器文化の編年について（鹿児島考古第9号 1974 鹿児島県考古学会）

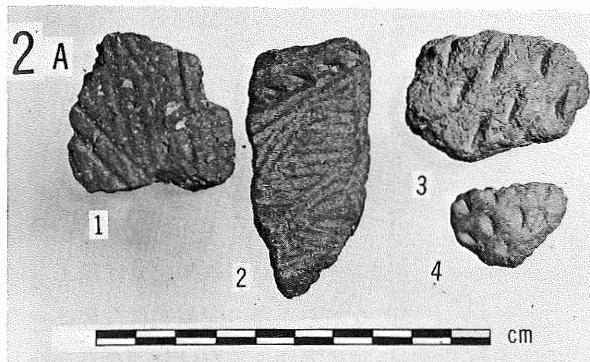
註2・3 新田重清 沖縄浦添市浦添貝塚出土の市来式土器について（古代文化23卷第9・10号 1971年10月 財団法人古代学協会）

註4 多和田真淳 琉球列島の貝塚分布と編年の概念（文化財要覧 1956年版 琉球政府文化財保護委員会）

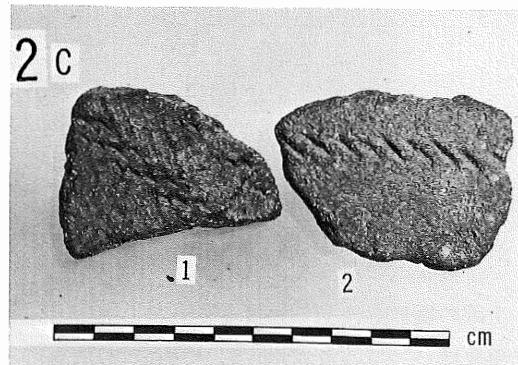
註5 高宮広衛・知念勇・上地正勝 沖縄県読谷村字渡具知東原発見の土器（考古学ジャーナル11月号 ニュー・サイエンス社）

註6 宮城長信氏（県立小禄高校教諭）の採集品に貝殻による压痕文土器があるとのご教示をうけた。

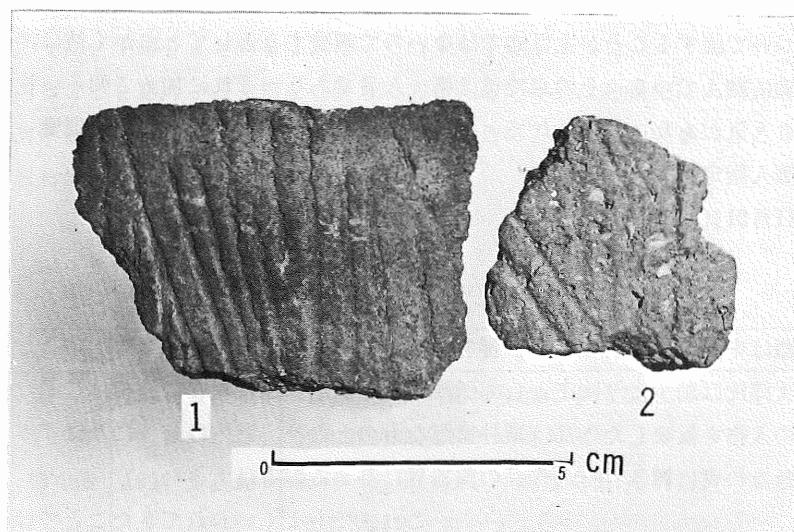
図版第2



1. 野国第2遺跡発見の曾畠・轟系土器

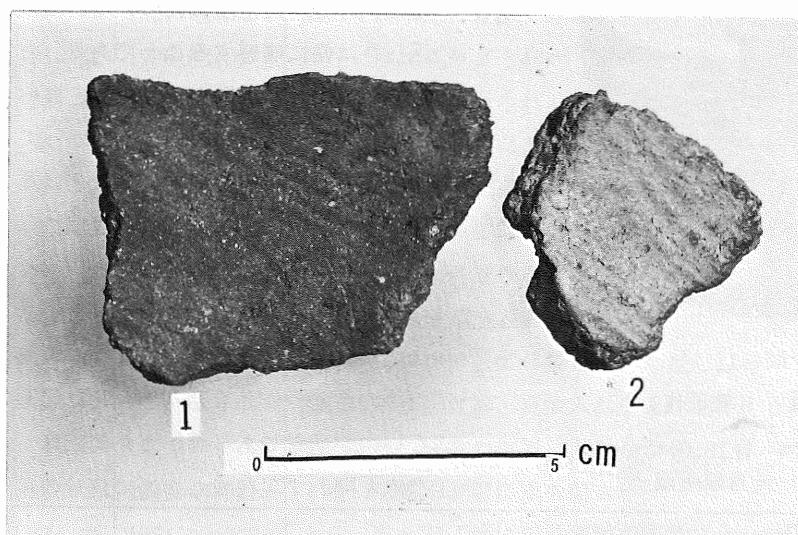


2. 野国第2遺跡発見の貝殻文土器と
条痕文土器



(一)
1 種子島本城遺跡出土の
曾畠式土器
(一)

2
野国第2遺跡発見の曾
畠系土器



(裏)